

# 宮崎縣に於ける水稻の風害に 就いて

宮崎縣立農事試験場 中川勝八

- 1、明治19—昭和20年の60年間に稲作期間に起つた暴風雨72回について見ると、月別の頻度は次の如くである。

月別	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	合計
回数	1	2	8	23	24	12	2	72
百分比	1.4	2.8	11.1	31.9	33.3	16.7	2.8	100

最大風速は10—20米/秒が72%、20—30米/秒が22%を占め、その方向はNNE及SSEが甚多い。

暴風雨の際の降水量は300耗以下が普通で、100—200耗程度が最も多い。

- 2、(イ) 出穂期頃の乾風(フエン)の被害について、實驗的研究に着手した。送風機は嘉代氏の設計に依るもの(胴の大き直径58cm、幅32cm、羽の大き32×12cm、腕の長さ25.5cm、羽の數6枚、送風口の大き24×18cm)を用ひ3HP電動機で1分間1,300回轉の場合に送風口から50—60cmの距離に於て、約17米/耗の風を得た。
- (ロ) 出穂直後の稲は引續き3時間以上この風の處理により大多數の穎花は内外穎が枯死して、白穂の状態となり結實に重大な障害をうけた。
- (ハ) 穂に機械的に擦傷を與へ(直径12cm、長さ50cmの厚紙製圓筒の下端を固定し、上端を1分間約150回轉の速さで半径5cmの圓運動をさせ、その圓筒の中央部に稻の

穂部を挿入し、60分間處理)たる後、上記の強風にさらした場合は1時間以上の處理により前記と同程度の被害を生じた。